

平成27年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT27277 ブータンと雲南省の染織刺繍にまつわる生活科学 染色と刺繍の実習をと
して生活科学に親しもう



開催日：平成27年12月13日(日)

実施機関：大分大学

(実施場所) (旦野原キャンパス)

実施代表者：都甲 由紀子

(所属・職名) (教育福祉科学部 准教授)

受講生：高校生9名

関連URL：<http://www.oita-u.ac.jp/01oshirase/topics/2015-053.html>

【実施内容】

○受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

本プログラム参加者として高校生9名、保護者2名が参加し、研究協力者としてゲスト講師の朝比奈はるか先生(防衛医科大学校)と研究室の学生7名の参加があった。また、開催当日は、ブータン刺繍専門家の菊池多絵先生の参加と支援を得ることができ、他に事業推進委員会委員の萩原なつ子先生と見学者1名の参加があった。

工夫した点については、講義内容が分かりやすく伝えるためスライドと講義テキストを作成し、講義中も実際の染織材料や民族衣装等を使って講義を行い、印象が残りやすくなるよう工夫をした。

また、参加者が飽きないように実習や体験が多くなるよう計画し、特に今回は募集人数よりも高校生の参加者が少なかったことから、高校生全員に民族衣装の着体験ができるよう準備を行い、当日は自ら着用感を体験してもらうことで、より講義の内容と結びつき印象に残るよう工夫をした。

○当日のスケジュール

- 9:30～10:00 受付(共用学生科学実験室1集合)
- 10:00～10:30 講義(都甲 染色材料の植物や動物、染色実習の進め方の解説)
- 10:30～12:00 染色実習(ラック、茜による刺繍糸とポケットチーフの染色)
- 12:00～13:00 昼食
- 13:00～14:00 刺繍の実習(染色した刺繍糸を使った刺繍)
- 14:00～14:30 ティータイム(ブータン・雲南省の民族衣装着装)
- 14:30～15:10 講義(都甲・朝比奈) (ブータン・雲南省のフィールド調査)
- 15:10～15:20 休憩
- 15:20～15:40 講義(都甲・朝比奈)(研究職の仕事、科研費の説明)
- 15:40～16:00 修了式(アンケート記入、未来博士号授与)
- 16:00 修了・解散

○実施の様子

1 挨拶、委員・講師紹介、講義(都甲 染色材料になる植物や動物の解説、染色実習の進め方の解説)

実施代表者による挨拶、講師と事業推進委員会委員の紹介、事業推進委員会委員からの科研費の説明、スケジュールの確認を行い、都甲より、天然染料に関する講義と次の実習の進め方を解説した。

2 染色実習(ラック、茜による刺繍糸とポケットチーフの染色)

ブータンより持ち帰ったラック、大分で育った日本茜、インド茜の3種類の染料を使用して、ポケットチーフと

刺繍糸を染色した。ポケットチーフはビー玉とおはじきとゴムを使い絞りの模様を入れた。染色を体験したことのない高校生も多く、始終楽しそうな雰囲気でした。また、染色の待ち時間についても有効に使用し、ブータンから持ち帰ったラック染の布の実物やブータンで撮影した染色の様子を動画で流し、より深い理解ができるよう工夫をした。



プログラムのはじまり



日本茜で染色中

3 昼食

刺繍糸を乾燥させ、和やかな雰囲気の昼食となった。記念撮影では染織したポケットチーフを広げ笑顔の撮影会となった。

4 刺繍の実習(染色した刺繍糸を使った刺繍)

染色した刺繍糸を用い、テーブルセンターに刺繍を施した。2色の糸を用い、チェーンステッチで渦巻きを作るブータン刺繍の中で出てくる技法で刺繍をした。皆真剣な面持ちで針と糸と布に向かい作業をされていたが、完成に至らなかった方もいたため、染織した刺繍糸を分け自宅続きをやってもらうことにした。



染色した刺繍糸を配布



刺繍の実習

5 ティータイム、ブータン・雲南省の民族衣装装着体験

ティータイムでは、高校生、保護者、研究室の学生、研究協力者等の皆でリラックスした雰囲気の中、染織や刺繍体験等の感想を交え交流をし、民族衣装装着体験では、雲南省でのフィールド調査と並行してミャンマーでも調査されている朝比奈はるか先生にご持参いただいたミャンマーの民族衣装と、ブータン刺繍作家の菊池多絵先生にご持参いただいたブータンの民族衣装を、高校生に装着してもらった。



ミャンマーの民族衣装装着



ブータンの民族衣装装着

6 講義(都甲・朝比奈)(ブータン・雲南省のフィールド調査)

朝比奈はるか先生から自身が研究代表者としてフィールド調査した、雲南省での調査の様子や薬用植物に関する研究内容、異分野で連携して研究することのおもしろさについて講義いただいた。

7 講義(都甲・朝比奈)(研究職の仕事、科研費の説明)

研究者になるための自身の体験や道筋、研究職の仕事内容、科研費事業の取組み内容について説明を行った。また、参加した高校生9名がすべて女性であったことから、最近の日本で女性研究者が受けられる支援や動向について説明を行った。

8 修了式(アンケート記入、未来博士号授与)

最後に、参加者よりこのプログラムに参加した感想を述べていただいた。まだ将来の進路が定まっていない高校1年生が多かったが、被服系の学科に進学が決定している高校3年生の参加もあり、それぞれに進路について考える経験になったようでした。



ゲスト講師 朝比奈はるか先生の講義



修了式

●事務局との協力体制

事務局との協力では、開催までの準備として、日本学術振興会との連絡調整、提出書類の確認・修正、広報課と連携した宣伝、ポスター等の県内高校への配布および高校訪問の際の同行、参加申し込みの受付、委託費の管理について協力を受け、開催当時は、会場準備、受付、お弁当等の手配について協力を受け、円滑に開催することができた。

●広報活動

本年度は下記の広報活動を行った。本年度が初回であったため、募集20名に対して参加9名であったが、くり返し開催することで高校教員との信頼関係や高校生同士の評判により参加者の増加が見込まれると考える。また、次回は理科教員だけでなく家庭科教員とも連携することで募集範囲を広げたいと考えている。

- ・ポスターとチラシを作成して県内の高校に配布した。
- ・近隣の高校に直接訪問し理科の教員に宣伝をお願いした。
- ・大学の公式ホームページ、Facebook 等、インターネット上で宣伝をした。

●安全配慮

- ・プログラム実施日の参加者を対象として傷害保険に加入した。
- ・染色を行う際にガスの火を使い、また、刺繍では針やハサミ等を使用するため、研究室の学生を配置し、火傷や怪我のないよう配慮した。

●今後の発展性、課題

募集締め切り直前まで計画していた募集人数よりも参加人数が少なく、追加募集の案内を行うなど参加者の確保に苦労したが、開催当日は、海外をフィールドとした生活科学の研究に関心をもってもらうことができたと感じている。また、何よりも一日中笑顔が多く見られ、参加者の様子やアンケートの結果から参加者の満足度は高いと感じられたため、次回は、広報活動など今回の反省点を生かし内容を整理して、より多くの参加者を集め開催したいと考えている。

【実施分担者】 なし

【実施協力者】 8 名

【事務担当者】 坂本和彦 研究・社会連携部研究協力課・主任